法方枕

然丈艸

草記紙

全全全

昭和四年二月十日印刷
昭和四年二月十三日發行

有朋堂文庫
枕草紙、方丈記、徒然草（非賣品）

不許複製

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地　塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦捷一

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地　有朋堂印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

緒言

枕草紙は、一條帝の皇后定子に奉仕したりし清少納言の著しゝ所にして、觀察の奇警、行文の簡勁を以て稱せらる。卽ちあらゆる事物事件に對して、犀利なる批判と自由なる感想とを縱横に披瀝したるものにして、一隻眼を具へたる女性の隨感錄たると同時に、又平安時代の一種の側面觀史とも見るべし。

方丈記は、建暦の頃、日野山奥に閑居したる鴨長明の著はせる所也。此書、量多からずと雖も、好く佛教思想の眞諦を捉へ、世相人事の轉變を達觀し、筆路淡々として自ら無限の幽情を寓せり。

徒然草は、南北戰亂の時に當り、洛西雙ヶ岡に世を背きたる吉田兼好が、事に觸れ折に臨みて其抱懷を漏らしたる書也。釋典を經とし、老莊を緯としたる出世間的の思想に充ち、又兼好一流の趣味觀の其間に横溢するものありて、筆路、適麗寔に言ひ難き興趣あり。

以上三書の校訂に關しては、枕草紙は春曙抄原本に基き、傍註、抄、其他數種の異本を參照し、方丈記は、流水抄及び諺解の原本に據り、徒然草は文段抄を底本に用ひ、諸抄大成の類を參考し、異本に於て差異の甚しきものは、何れも頭註に標記し置けり。　枕草紙徒然草中の對話の全部、及び引用句の類にして本文と紛らはしきものには、概ね引用符を附せり。　元來我邦の文章にては、語法の性質上、其對話に於て、直接法と間接法との區別を明確

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にしがたき所ありて、一々之に引用符を施すは不穩當の嫌ひあるも、もと解釋上の困難は多く玆に起因するが故に、假に對話其他に之を施して閲讀通解の便を圖りたる也。

本書の索引は、三種ともに、思想、語句、逸話、故實、故事、其他の各方面に亙りて最も詳細精密ならん事を期せり、これ我が古典中の三大隨筆は、其研究引用の範圍極めて廣く、一讀の後尚ほ反覆參考の要あるべきを信じたればなり。

大正元年十月

校訂者　塚本哲三

目錄

一枕草紙……一
一方丈記……二九七
一徒然草……三一七
枕草紙索引……四五九
方丈記索引……五五七
徒然草索引……五七一

枕草紙

春は曙、やうゝ白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

をかし―趣あり

夏は夜、月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなゝど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲のねなゝど、いとあはれなり。冬は雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜ゝなどのいと白く、またさらでもいと寒き火なゝど急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきゞし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

あはれなり―情趣深し

炭もて云々―炭を持ち歩くなども季節から似合はしき趣あり

ころは、正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべてをりにつけつゝ。

一年ながらをかし。

正月一日は、まいて空の景色うら〳〵と珍しく、かすみこめたるに、世にありとある人は、姿容心ことにつくろひ、君をもわが身をも祝ひなゝどしたるさま、殊にをかし。

七日は、雪間の青菜青やかに摘み出でつゝ　例はさしもさる物目近からぬ所に　もてさわぎ、白馬見んとて、里人は車きよげにしたてて見にゆく。中の御門の閾ひき入るゝほど、頭ども一處にまろびあひて、指櫛も落ち、用意せねば折れなゝどして、笑ふもまたをかし。左衛門の陣などに、殿上人あまた立ちなゝどして、舍人の弓ども取りて、馬ども驚かして笑ふを、僅に見入れたれば、立蔀などの見ゆるに、主殿司、女官などの、行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をかく立ち馴すらんなど思ひやらるゝ中にも、見るはいと狹きほどにて、舍人が顔のきぬもあらはれ、白きもののゆきつかぬ所は、誠に黑き庭に雪のむら消えたる心地して、いと見ぐるし。馬のあがり騷ぎたるも恐しく覺ゆれば、引き入られてよくも見やられず。

白馬―正月七日、左右馬寮より二十一匹の白馬を宮庭に引き出し、天皇の御覽に供へ、又庶民にも示す

顔のきぬ―顔の地膚

もちかゆ―望粥、小豆粥なり

心もとなく―待遠しく

あなかま―あゝ喧し

おほどかにて―鷹揚にして

まが〳〵しく―忌々しげに

八日、人々よろこびして走りさわぎ、車の音も、つねよりはことに聞えてをかし。十五日は、もちかゆの節供まゐる。かゆの木ひき隠して、家の御達、女房などのうかゞふを、うたれじと用意して、常に後を心づかひしたる景色もをかしきに、いかにしてげるにかあらん、打ちあてたるは、いみじう興ありとうち笑ひたるも、いと榮々し。ねたしと思ひたる、ことわりなり。去年より新しう通ふ壻の君などの、内裏へ參るほどを、心もとなく、所につけて我はと思ひたる女房ののぞき、奥のかたにたゞずまふを、前にゐたる人は心得て笑ふを、「あなかま〳〵」と招きかくれど、君見知らず顔にて、おほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らん」などいひ寄り、はしりうちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君もにくからず愛敬づきて笑みたる、ことに驚かず、顔少し赤みてゐたるもをかし。また互に打ちて、男などをさへぞうつめる。いかなる心にかあらん、泣きはらだち、打ちつる人を呪ひ、まが〳〵しくいふもをかし。内裏わたりなど、やんごとなきも、今日はみな亂れて、かしこまりなし。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もちかゆ―望粥、小豆粥なり

心もとなく―待遠しく

あなかま―あゝ喧し

おほどかにて―鷹揚にして

まが〳〵しく―忌々しげに

八日、人々よろこびして走りさわぎ、車の音も、つねよりはことに聞えてをかし。十五日は、もちかゆの節供まゐる。かゆの木ひき隠して、家の御達、女房などのうかゞふを、うたれじと用意して、常に後を心づかひしたる景色もをかしきに、いかにしてげるにかあらん、打ちあてたるは、いみじう興ありとうち笑ひたるも、いと榮々し。ねたしと思ひたる、ことわりなり。去年より新しう通ふ壻の君などの、内裏へ參るほどを、心もとなく、所につけて我はと思ひたる女房ののぞき、奥のかたにたゞずまふを、前にゐたる人は心得て笑ふを、「あなかま〳〵」と招きかくれど、君見知らず顔にて、おほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らん」などいひ寄り、はしりうちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君もにくからず愛敬づきて笑みたる、ことに驚かず、顔少し赤みてゐたるもをかし。また互に打ちて、男などをさへぞうつめる。いかなる心にかあらん、泣きはらだち、打ちつる人を呪ひ、まが〳〵しくいふもをかし。内裏わたりなど、やんごとなきも、今日はみな亂れて、かしこまりなし。

祭、四月、中の酉の日に行はる

たどくしきを―はつきりとせぬ聲を

履子―クツツケノアシダ（和名抄）

ちやうざ―長者、東寺の住持なり

ことぐく―異事、特にきはだち異

霞も霧もへだてぬ空の景色の、何となくそぞろにをかしきに、少し曇りたる夕つかた、夜など、忍びたる杜鵑の、遠うそら耳かと覺ゆるまで、たどくしきを聞きつけたらん、何ごこちかはせん。祭近くなりて、青朽葉、二藍などのものどもおしまきつゝ、細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて、行きちがひもて歩くこそをかしけれ。末濃、村濃、卷染など、常よりもをかしう見ゆ。童女の頭ばかり洗ひつくろひて、形は皆痩えほころび、打ち亂れかゝりたるもあるが、履子、沓などの緒すげさせ、裏をさせなどもて騒ぎ、いつしかその日にならんと、急ぎ走り歩くもをかし。怪しう踊りて歩く者どもの、さうぞきたてつれば、いみじく、ちやうざといふ法師などのやうに、ねりさまよふこそをかしけれ。ほどくにつけて、親をばの女、姉などの供して、つくろひ歩くもをかし。

ことぐくなるもの

法師の詞。男女の詞。下司の詞にはかならず文字あまりしたり。

なりたる物

験者—修験者、加持祈禱者

てうずる—調伏する

所狭く云々—窮屈にて心中いかに苦しからんと氣の毒也

四足—四足門、四本柱を四方に添

おもはん子を法師になしたらんこそは、いと心苦しけれ。さるは、いとたのもしきわざを、唯木のはしなどのやうに思ひたらんこそ、いといとほしけれ。精進物のあしきを食ひ、寐ぬるをも、若きは物もゆかしからん。女などのある所をも、などか忌みたるやうに、さしのぞかずもあらん。それをも安からずいふ。まして験者などのかたは、いと苦しげなり。御嶽、熊野、かゝらぬ山なく歩くほどに、恐しき目も見、験あるきこえ出できぬれば、こゝかしこによばれ、時めくにつけて安げもなし。いたく煩ふ人にかゝりて、物怪てうずるも、いと苦しければ、困じてうち眠れば、「ねぶりなどのみして」と咎むるも、いと所狭く、いかに思はんと。これは昔のことなり。今様はやすげなり。

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども、陣屋の居ねば入りなんやと思ひて、髪つきわろき人も、いたくもつくろはず、寄せて下るべきものと思ひあなづりたるに、檳榔毛の車などは、門ちひさければ、さはりてえ入らねば、例の筵道しきておるゝに、いとにくく腹だたし

へ造れる門

陣屋の云々―宮中の如く左右衛門の陣所の宿直人も居るにあられば只乘車のまま入るべき事と思ひて

于定國―前漢書に出づ

進士―式部省の官吏登庸試驗に應ぜしむべく國々より選出せる人材

けれど、いかゞはせん。殿上人、地下なるも、陣に立ちそひ見るもねたし。御前に參りて、ありつるやう啓すれば、「こゝにも人は見るまじくやは。などかはさしもうち解けつる」と笑はせ給ふ。「されど、それは皆めなれて侍れば、よくしたてて侍らんにしこそ驚く人も侍らめ。さてもかばかりなる家に、車入らぬ門やはあらん。見えば笑はん」などいふ程にしも、「これまゐらせん」とて、御硯などさしいる。「いで、いとわろくこそおはしけれ。などてかその門狹く造りて、住み給ひけるぞ」といへば、笑ひて、「家のほど身のほどに合せて侍るなり」と答ふ。「されど門の限を、高く造りける人も聞ゆるは」といへば、「あなおそろし」と驚きて、「それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずば、承り知るべくも侍らざりけり。たまくこの道にまかり入りにければ、かうだに辨へられ侍る」といふ。「その御道もかしこからざめり。筵道敷きたれば、皆おち入りて騷ぎつるは」といへば、「雨の降り侍れば、實にさも侍らん。よしく、また仰せかくべき事もぞ侍る、罷り立ち侍らん」とていぬ。「何事ぞ、生昌がいみじうおぢつるは」

それも尋ねず―この語のドに、ねぶたければそのまゝ寐たりと補ひ見るべし

ゆめに―決して見えぬもの―不思議なるもの、妙なもの

と問はせ給ふ。「あらず、車の入らざりつることといひ侍る」と申しておりぬ。同じ局に住む若き人々などして、萬の事も知らず、ねぶたければ皆寢ぬ。東の對の西の廂かけてある北の障子には、鏁もなかりけるを、それも尋ねず。家主なれば、案内をよく知りてあけてけり。あやしう涸ればみたるものの聲にて、「侍はんにはいかゞ」と數多たびいふ聲に、驚きて見れば、几帳の後に立てたる燈臺の光もあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすきゞしきわざ、ゆめにせぬものの、家におはしましたりとて、無下に心にまかするなゝめりと思ふもいとをかし。わが傍なる人を起して、「かれ見給へ、かゝる見えぬものあゝめるを」といへば、頭をもたげて見やりて、いみじう笑ふ。「あれは誰ぞ、顯證に」といへば、「あらず、家主人、局主人と定め申すべき事の侍るなり」といへば、「門の事をこそ申しつれ、障子開け給へとやはいふ」「なほその事申し侍らん、そこに侍はんはいかに〳〵」といへば、「いと見苦しきこと、更にえおはせじ」とて笑ふめれば、「若き人々おはしけり」とて、ひきたてていぬる、後に

つとめて―その翌朝

ちうせい―小さい、生昌の方言口調をそのまま寫せる也

折敷―片木板（ヘギイタ）を折りまげて作れる盆

まゐりよからめ―食べよからんきすく―氣直、正直一遍

笑ふことといみじ。あけぬとならば、唯まづ入りねかし。消息をするに、よかゝなりとは誰かはいはんと、げにをかしきに、つとめて、御前に參りて啓すれば、「さる事も聞えざりつるを、昨夜のことに愛でて、入りにたりけるなゝめり。あはれ彼をはしたなく言ひけんこそ、いとほしけれ」と笑はせ給ふ。

姫宮の御かたの童女に、裝束せさすべきよし仰せらるゝに、「わらはの袖の上襲は何色に仕う奉るべき」と申すを、又笑ふもことわりなり。「姫宮の御前のものは、例のやうにては惡氣に候はん。ちうせい折敷、ちうせい高杯にてこそよく候はめ」と申すを、「さてこそは、上襲著たる童女もまゐりよからめ」といふを、「猶例の人のやうに、かくないひ笑ひそ、いときすくなるものを、いとほしげに」と制したまふもをかし。中間なるをりに、「大進ものきこえんとあり」と、人の告ぐるを聞し召して、「又なでふことといひて笑はれんとならん」と仰せらるゝもいとをかし。「行きて聞け」とのたまはすれば、わざと出でたれば、「一夜の門のことを中納言に語り侍りしかば、いみじう感じ申されて、いかでさるべ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com